

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

神宮式年遷宮



三重県神道青年会報 第39号

会長挨拶

会長 石上陽祥



先ず以て、謹んで聖寿の万歳と皇室の弥栄をお慶び申し上げます、神宮上げ、神宮におかれましては本年に執り行われます第六十二回神宮式年遷宮に向け諸祭恙なく齋行されますこと慶賀に存じ上げます。

平素より諸先輩会員の皆様には青年会の諸行事活動等にご理解と格別のご支援ご協力を賜り心より御礼申し上げます。

青年会の会務をお預かりしてより早くも二年が過ぎました。顧みますと、会長就任直前の平成二十三年三月、東北地方を中心とした大規模な地震と津波、原発事故を誘発した東日本大震災が発生しました。立ち上がったばかりの執行部において青年神職として何をすべきか協議を重ね、被災地へ向かい支援活動を行う事を決めました。

被災地へ行くには様々な問題点もありましたが、各神社の宮司様や諸先輩方のご理解とご支援を賜り被災地で支援活動を実践する事が出来ました。又、同年八月に紀伊半島を襲った台風十二号で被災した神社への復旧支援活動においては、東日本大震災での支援活動の経験を活かし迅速に行動できたと

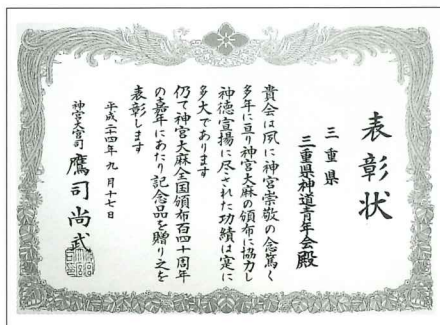
思います。被災地ではまだまだ復興半ばであり、私達青年会は微力ながら今後も継続して復興支援活動を進めて行くと共に、災害に対し常に備える心構えを養い防災意識を高めていきます。

さて、今期は神宮大麻が全国に頒布されて百四十年を迎えました。青年会の事業の一つであり、先輩方より脈々と受け継いできた大麻頒布促進運動が認められ、この度、神宮大麻全国頒布百四十年記念表彰の団体の部において、神宮大宮司様より表彰を賜りました。先輩方の努力の成果であり私達も誇

らしく、感謝申し上げます。今後この活動を絶やすことなく後輩へと引き継ぎ、大麻頒布活動に努めてまいります。

今期は伊勢での研修や行事が多くありました。中でも平成二十四年三月に齋行された豊受大神宮の上棟祭へ参列させていただいたことは光栄であり、いよいよ御遷宮が近づいてきた事を実感しました。又、同年八月には神社スカウト全国大会が伊勢の地で開催され、開催奉告祭を青年会で奉仕させていただき、良い経験をさせていただきました。

青年会には色々な体験・経験が出来る場所です。一人二人より大勢の方が沢山の体験・経験が出来ると思います。会員の皆さん、お忙しいでしょうが一度青年会の活動に顔を出してみてください。最後に、今期もお力添えをいただきました皆様から厚く御礼申し上げます。今後も青年会活動



にご支援ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。ありがとうございます。



総務・広報委員会

総務・広報委員長 磯島一郎



今から二年前、三重県神道青年会の役員に初めて出向する事になり、しかも総務・広報委員会の委員長と言う大役を仰せつかり、不安と緊張のスタートでありましたが、この二年間を振り返ると、同じ委員会の皆様に助けられながら何とか今日まで辿り着いた感があります。大変な時もありましたが、私にとって、短いながらも非常に充実した時間でした。今思い出されることは以前、神社庁からの帰路、塚本理事と「できればもう少し若いとき、県神青に出向したかった」と話したことです。

総務・広報委員会の主な仕事は総会等の設営や資料、活動記録の作成及び会報・通信の編集・発行の広報活動です。特に年二回、夏冬発行の『神青通信』と年度末の『榊葉』の編集作業は委員会の重

要な仕事でしたが、社務で多忙にも関わらず、快く原稿を作成していただいた会員の皆様方のお陰で、それぞれ充実した紙面が出来たと

思われます。その中でも『神青通信』の冬号は『榊葉』とも発行の時期が近く、内容も殆ど同じなので、夏号をメインに、冬号は必要に応じて発行する形に変更したり、従来二色刷だった『榊葉』を今回から表紙のみカラーに変更するなど、いくつか試行致しましたが、後輩の皆様には今後よりよい広報活動を目指していただきたいと思います。

県の神道青年会も現在三十代の役員が多いようですが、若い方も積極的に参加し、そこで得た経験や絆を活かして奉務先で活躍していただければ幸いです。

末筆ながら、会長始め役員の皆様とは一緒に仕事ができ、共に仲間として素晴らしい時間を過ごせたことを感謝しております。十一年先・二十年先もこのような関係が続くことを願いつつ、今後は後輩に託し、三重県神道青年会の益々の発展を祈念致します。

渉外・福祉委員会

渉外・福祉委員長 楠直幹



会長より 渉外・福祉委員長を命ぜられたときは、正直、専門神職でもない私などが務めることが出来るだろうかと思いましたが、そして、そのことを会長にお伝えいたしましたら「心配いらな

いから」といわれ、委員長をお引き受けいたしました。年間の事業内容としては、卒業式(隔年)・新職員交流会・忘年会・新年会の企画立案でありました。委員会を開催し、いろいろな

アイディアを出し合いました。卒業式では、隔年が原則でしたが、東日本大震災があり六月に延期となりました。卒業式では、卒業生の方よりこれからの神社界への期待を述べられ、非常に責任を感じ、身の引き締まる思いでありました。そして、卒業生を気持ちよく送り出すことが出来ました。新職員交流会では、初年度は卓

球、次年度はフットサルの競技を行い、新職員との交流を深めることが出来ました。その後の親睦会で、これからの斯界について語り合いました。そこでは大きな刺激を受け、三重県神道青年会がどのような活動をしているのかを知ってもらうことができました。忘年会は津市で行われ、それぞれの一年間の反省や抱負について語り合いました。新年会では、神宮、二見興玉神社、猿田彦神社に参拝し、役員会を経て伊勢市内で行いました。それぞれが年の初めに当っての計画などを話し合いました。

委員会メンバーの協力のもと行事を円滑に進めることができました。一人でも多くの人たちに参加してもらえよう企画を考案することが大切だと反省しております。忙しい中、参加してくださった方々に感謝しております。この経験から得たものを神明奉仕に活かしていきたいと思っております。これからの三重県神道青年会の更なる発展を願っております。

教化・研修委員会

教化・研修委員長 遠藤嘉章



私が教化・研修委員長を仰せつかりまして、二年が経ちました。

教化・研修というものは、名前の通り神社の教化を主に目標として、活動しております。その教化活動の中でもお宮の子供会という事業があります。平成二十三年度は結城神社にて、二十四年度には二見興玉神社にて、一泊二日で行いました。

このお宮の子供会は、子供達に神社と触れ合い礼儀作法など、少しでも覚えてもらうという教化活動です。

お宮の子供会には沢山の子供が集まり、当たり前ですが、色々な性格の子供達がいまいます。毎年私が思う事は、戦後から「平等の権利」という言葉を使う人が多いですが、平等とはどのような事を言うのでしょうか？例えば勉強する子としない子がいます。「勉強する子に

のみ、お菓子上げる。」というのは、最近では不平等と言われるのです。

私は「勉強する子にはお菓子上げる。」という時点でどちらにも平等であると思います。そこで勉強する、しないは、個人の自由なのです。逆に勉強しない子にお菓子を上げたら、勉強した子から不平等と言われるでしょう。そこで、お菓子を貰った子が、貰わなかった子に分けて上げる。これが、人の優しさではないでしょうか。

子供達が「平等をはき違えた考えを持つ」という問題は、家庭でも起こりえることだと思えます。最近の学校では道徳は教えてくれませんが、子供を育てる立場の親が、平等という言葉の間違えず教えていく必要があります。この教化活動では道徳も教えていかなければならないと私は感じました。

至らぬ点は多々あったと思いますが、会長を始め役員、会員の皆様に支えられ、二年間無事に務めることができました。私にとって大変貴重な二年間でした。ありがとうございました。

至らぬ点は多々あったと思いますが、会長を始め役員、会員の皆様に支えられ、二年間無事に務めることができました。私にとって大変貴重な二年間でした。ありがとうございました。

定例総会

平成二十三年定例総会が四月二十三日(月) 神社庁会議室にて



いて会長以下役員会員二十六名、来賓二名が出席し開催された。開会儀礼に続いて来賓の石上紀男三重県神社庁長、藤森政一三重県氏子青年協議会長より祝辞を頂戴し、その後、菱川副会長が議長として選出され議事が進められた。

まず会長より平成二十三年年度の監査報告、決算報告、原監事よりまた役員補選が行われ、会長指名理事として金井神社禰宜の種村睦貴会員が指名され承認を受けた。続いて平成二十四年度の活動方針並びに事業計画案・予算案が夫々承認されて定例総会は滞りなく閉会した。(塚本敏記)

会務報告

Table with columns for dates and activities: <平成二十四年四月>, <五月>, <六月>, <七月>, <八月>, <九月>, <十月>

葉

榊

沖縄全戦没者慰霊祭

六月十二日(火)、神道青年全国協議会主催による沖縄県本土復帰四十周年記念「沖縄県全戦没者慰霊祭」及び「尖閣諸島諸問題早期解決祈願祭」に会長を始め会員四名が参加した。



当日はあいにくの雨模様であったが、祭典を通じて戦没者への感謝の気持ちが一層深くなり、神職として大切な事を学び、かけがえない経験をさせて頂いた。また、慰霊祭とあわせて尖閣諸島諸問題早期解決祈願祭も斎行された。

今後、斯界は一丸となって政府に諸問題の早期解決を強く訴える必要があると痛感すると共に、国のために命を懸けて戦った御英霊に対し恥じないような行動をしなければならぬと心を新たにしたい。(菅原工記)

第十一回

神社スカウト全国大会

第十一回神社スカウト全国大会は「くりかえし 力をいただく」をテーマに、八月七日(火)～十日(金)の四日間、三重県営総合競技場にて開催された。今回は、全国各地より千六百余名、また台湾からも二十余名のスカウトが参加した。

大会の無事を祈願した。また、三日目の早朝、五十鈴川鳥帽子岩前にてみそぎ行事を行った。小倉基三三重県神社庁錬成行事道彦



金山修



竹内理助彦のもと、会長を始め十名の役員会員が助彦を奉仕した。約四百名のスカウトが参加し皆大さな声で元気を取り組み、みそぎ行事を終えた参加者が、清々しい表情であったのが大変印象に残った。その後行われたカヌー行事についても、参加者に危険が及ばぬよう監視など警備、警護の依頼があり、会長始め七名の役員会員がその任に当たった。当会に於いても、毎年青少年を対象とした「お宮の子供会」を開催しているが、今大会の諸行事を通じて青少年に対する教化活動の大切さを、改めて感じる事ができ、今後の事業に活かしていきたいと思える助勢奉仕であった。(菅原工記)

Table with columns for dates and activities: 一五日, 二二日, 二四日, 二七日, 二九日, 一〇月, 一六日, 二六日, 三〇日, 九月, 二九日, 二二日

新職員交流会

七月六日
(金)、県営体育館(伊勢市)にて開催され、会長以下四十一名(新職員は十五名)が参加し、A、Eの五チームに分かれ、総当たり戦でフットサルを行った。



各神社の混合チームの為、お互い初めての顔も多く、最初は戸惑っている様子だったが、しばらくすると歓声も上がり、お互いに讃え合う姿も見られ、楽しくスポーツをする雰囲気伝わってきた。どのチームも実力は均衡していて、白熱した試合が見られた。

その後は、猿田彦神社青少年館に場所を移し表彰式・懇親会が開催された。まず、会長より新職員に向け歓迎の挨拶があり、新職員の自己紹介や意見交換があった。短い時間であったがお互い汗を流し、杯を交わすことで、絆も深めることができた。

(磯島一郎 記)

お宮の子ども会

第三十三回を迎えた恒例の「お宮の子供会」が、八月二十三日(木)・二十四日(金)の両日にわたり、伊勢市の二見興玉神社(片岡昭雄宮司)において開催された。神社に集合した二十一名の子供たちは、先ず正式参拝を行った。会長の先導のもと子供達の代表が玉串を捧げ、神妙な面持ちで拝礼した。

続いて各自が自己紹介をして三つの班に分かれて班旗を作成し、室内でゲーム等を行い交流した。又、班ごとに班旗を掲げ、神社職員の案内のもと神社境内を



散策した。夕食の後、庭燎の集いとしてゲームや花火を楽しんだ。神青役員による演劇「お伊勢参り」も上演され、主演の吉田理事のシリアスかつコミカルな演技には、子供達からも歓声が上がった。翌日は二見の海で禊をし、銘菓御福餅本家で御福餅の製造を、岩戸館で天然の塩作りを見学した。最後に親への感謝の手紙を書き、会長が「親への感謝の気持ちをもってこの手紙を帰ったら渡しませう」と挨拶し二日間の日程を終了した。(小倉孝之 記)

神青協夏期セミナー

八月二十九日(水)、三十日(木) 國學院大學常磐松ホールにて、『教育』を日本人の心を正しく伝える為に』を主題に、全国から八十六名の青年神職が参加し、当会からは五名が参加した。

初日は、松前町立岡田中学校教諭 大津奇章三氏により「子供たちに皇室をどう教へるか」と、株式会社寺子屋モデル社長 山口秀範氏による「お手本を持つ生き方(寺子屋のススメ)」と題する講義が行われ、二日目は大津奇・山口両講師に有村参議院議員と神青協大野会長を加え、神青協佐藤副会長のコーディネートにより「未来を見据えた実践へ」と題し、パネルディスカッションが開催された。

大津奇氏は、現在の教育現場では、天皇陛下・国旗国家についていかに正しい教育が行われているか、また子供達に教えるのがいかに難しいかを報告された上で、生活に根ざした具体的な教え方をする必要があると説かれた。

山口氏は、子供達に日本人の素晴らしさを伝え、自信を取り戻さ

せ、具体的な人生のお手本を見つける方法として、偉人伝を読み聞かせることの大切さを述べられた。

翌日のパネルディスカッションでは、各先生方が国家・国体を護る為には、教育が重要な位置を占める共通認識のもと、現場の問題点から広く安全保障問題に至るまで意見を述べられた。

二日間を通じ、先生方が述べられていたことは、日本人の心を護る為には教育が非常に重要であり、具体的には子供達に「身近」な切り口から「目に見えるもの」で、なおかつ一流の例えを示す必要がある。言い換えれば教える側の我々は、常に一流を目指し、研鑽に励まなくてはならないということであろう。

山口氏は講義の中で「皆さん古典を読んで下さい」と述べられた。これは、古典を通じて日本の国風を学んで欲しいという意の言葉であったかと思うが、その言葉の奥には我々青年神職が一流の神職を目指す上で、より一層日本の古典・故実に精通して欲しいという氏の願いも込められていたのではないだろうか。(山口祐樹 記)

神道青年東海地区協議会総会並びに教化研修会

九月十日(月)熱海市の後楽園ホテルにて総会、研修会、懇親会が開催され、翌十一日(火)は姫の沢公園スポーツ広場にて親睦行事が行われた。

先ず開講式では神道青年東海地区協議会龍尾重幸会長による挨拶、櫻井豊彦静岡岡県神社庁長はじめ来賓から祝辞を賜り、続いて総会では森匡史議長のもと議事が円滑に進められた。

教化研修会は「神社をとりまく地域の活性化」という主題にて、第一部が富士宮やきそば学会会長 渡辺英彦氏による「地域のブランド作りと活性化」、第二部が熱海市観光協会 田金清氏による「熱海市と観光まちづくり」と題し、講義を頂戴した。

神社と地

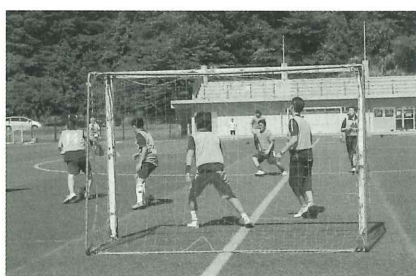


- 五日 第六回役員会 一八名出席 神社庁
 - 五日 忘年会 一九名参加 明風
 - 二日 神宮・南部ブロック研修会 二二名参加 神宮司庁
 - 四日 神青東海地区定例協議会・臨時顧問会 四名参加 静岡浅間神社他
- 〈平成二五年一月〉
- 二一日 第七回役員会 一六名出席 猿田彦神社
 - 二一日 新年会 四一名参加 庄や

- 二日 建国記念の日啓発活動 (神宮・南部ブロック) 一〇名参加 宇治橋前
- 七日 建国記念の日啓発活動 (北部ブロック) 九名参加 近鉄四日市駅前
- 八日 建国記念の日啓発活動 (中部ブロック) 五名参加 近鉄津駅前
- 五日 中部ブロック研修会 二二名参加 神社庁
- 一八日 神青東海地区協議会 遷宮啓発研修会 一一名参加 神宮司庁

- 〈三月〉
- 六日 第八回役員会 一六名出席 神社庁
- 二二日 県外研修会 五名参加 高知市内
- 二三日 神青協中央研修会 九名参加 高知市内
- 一四日 三重県護国神社祭祀助勢奉仕 八名奉仕 三重縣護国神社
- 一七日

域の密接な繋がりを再認識し、B-1グランプリで全国へ影響を与えた巧みな情報発信による町おこしの手法や、時勢に合わせたニーズを分析した熱海市の新たな観光戦略を考察した。地域と神社それぞれの活性化による相乗効果を目指し、斯界の発展に努める為の実りある研修であった。



二日目の親睦会はフットサルを総当たりのリーグ戦で行った。三重県チームは、得失点差で惜しくも二位の成績であったが、秋晴れの中、清々しく体を動かして有意義な親睦行事となった。最後に、研修中福島県いわき市美浜会の吉田定聡会長から震災復興協力への謝辞を頂戴した。中長期的な支援活動が必要となっていく中で、被災地の日でも早い復興をお祈りしたい。(神田直久 記)

第十一回 ブロック研修会

北部ブロック

十月五日(金)、多度大社にて開催され、会長以下十五名が参加した。

研修会の題目は「神青の歴史」――先ず志氏神社宮司・富永主税先生よりご高話いただき、結成三十周年の年に副会長であったこと。お宮の子供会が好評で八十名以上の参加者があり、また会員の家族会も行われていたこと。会員同士での勉強会が行われていたことなど、現在よりも青年会に活気があったと話された。

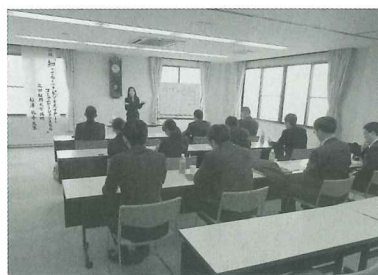
続いて椿大神社宮司・山本行恭先生よりご高話いただき、昭和六十年から六十二年に掛けて会長をされていた時期のこと。現在の神青会員に対し、青少年の教化が第一の課題であるとし、崩壊しかけた日本を立て直すために、神話をうい、日本の歴史や伝統を子供たちに教えていかなければならないこと。会員の活動範囲も県内だけに留めることなく県外との交流を多岐に持ち、神宮の啓蒙を第一と

すべきことなど、精力的に活動の場を広げてほしいと激励の言葉を頂いた。(大野一省 記)

中部ブロック

二月十五日(金)、会長以下十二名の参加のもと神社庁会議室にて開催された。

当日は、高田短期大学より杉浦礼子准教授を講師にお迎えして「知っておくべきビジネスマナーとコミュニケーションスキル」と題してご講演頂いた。当日は三時間という限られた時間の中で、テキストを用いておじぎの角度から名刺の渡し方・来客の案内など、我々神職も当然身につけねばならない作法を丁寧にご説明頂いた。そして後半には受講者全員が



者全員が

参加して電話応対のマナーについて実践しつつ学ばせて頂いた。最後に質疑応答の時間となり受講生皆々これからの社務に活かしていこうと積極的に講師に質問を投げかけていた。

この研修会に参加して改めてマナーとは人間同士の思いやりの表現であること認識し、神職として大切な事を学び、大変有意義な研修会であった。(福井健士 記)

神宮・南部ブロック

十二月十二日(水)伊勢市内にて開催された。鳥羽支部、松阪支部より三名参加下さり、会長以下総勢二十二名の参加となった。まず外宮にて正式参拝を行った後、せんぐう館へ移り深田学芸員より館内をご説明頂いた。

まず館内エントランスに入り目に飛び込んでくるのは外宮御正殿の御扉とその巨大な御匙御鑰。比べることも恐れ多いが我々の御社と比するとその大きさに圧倒される。続いて深田学芸員より遷宮の歴史や関連する数々の祭典、貴重な御神宝やその職人達の技術の継承について解説を受けた。一番奥



には外宮御正殿の原寸大模型があり、普段決して間近で見ることの出来ない御正殿の細部まで見ることが出来た。今後、この素晴らしい施設に氏子崇敬者を引率し貴重な資料・展示品と共に遷宮について地域に伝えていかなければならないと感じた。

その後、神宮司庁に場所を移し石垣仁久講師より「せんぐう館について」という主題で講演頂いた。戦後の第六十回式年遷宮について延期の経緯や国民奉賛によって成されるに至った国民の想いなどを様々なエピソードを交えてご教授頂いた。いよいよ来年と迫った遷宮に向けて、我々も今日の研修で学んだ先人達の熱き想いを地域の方々に伝え、地元として遷宮を盛り立てて行かなくてはならないと感じた。(塚本 敏 記)

初穂曳(内宮領川曳)

十月十六日(火)に



桜が丘奉曳団の一員として当会より会長以下八名が助勢奉仕した。木遣唄の声高らかに響き渡り「エンヤー」の声と共に采が振られ皆が一斉に綱を引くと米俵十俵、稲穂百五十束を乗せた川舟は少しずつ進み始めた。最初は膝程の水深が進むにつれてだんだんと深くなる。そこで二本の綱で木遣子をはさみ、綱を上下にゆすり木遣子を持ち上げようと「練り」を何度も行いながら舟を曳く。宇治橋が近くなると、浅瀬により舟は思うように進まず、おまけに足場は滑り易く力が入らない。この難所を乗り越えると最高潮へと向かう。「エンヤ曳」にて五十鈴川より神苑まで一気に舟を引き上げた。その後、内宮五丈殿へ初穂を納めて務めが無事終わり皆が感動と達成感に包まれた。(三橋 航記)

お白石拾ひ

十月十六日(火)、神社本庁・伊勢神宮崇敬会・伊勢神宮奉仕会の共催により開催され、当会より二名が参加した。

事前の説明によると、探すのは「こどもの握りこぶしほどの大きさで、ほんのりと温かみ帯びた透明感のある純度の高い石英系白石」で、近年は上流に建設されたダムの影響により、良質な白石が減少しており、探し始めると白い石であっても「石英系白石」ではなかったり、黒い線が入っていたりとなかなか難しい。今回拾い集めた白石が一つでも御敷地に奉獻されることを期待したい。(宮田幸尋 記)



(宮田幸尋 記)

神青協「東日本大震災」復興支援活動

十月二十四日(水)二十六日(金)の三日間、神道青年全国協議会の方々と共に、宮城県石巻市

鮎川浜金華山にご鎮座する金華山黄金山神社にて震災復興支援活動が行われ、三名が参加した。二十四日の十七時頃、金華山港に到着。参集殿に集合し正式参拝をした。その後、神職より由緒や被災状況をご説明いただいた。大きな被害状況としては地震による地盤沈下と、台風によりもたらされた大海祇神社の半壊、参道の崩壊、ダムに土砂が溜まったことなどが挙げられた。

翌二十

五日早朝より作業が開始された。作業内容は金華山の頂上にご鎮座する大海祇神社修繕用資材(材



資材(材

木や約百個超もの土嚢)の運搬であったが、傾斜が高く足場が悪いため作業は困難なものであった。途中より背負子に資材を背負って頂上まで運搬する組と、リレー形式で運搬する二組にわかれ作業の効率化を図った。何往復も作業を行い体力も限界であったが、誰一人として音を上げるものはいなかった。この日は三分の一ほど頂上に運び、残りを七合目まで運び終わった所で作業を終えた。

翌日は七合目から頂上までの運搬を行った。昨日の疲れも残っていたため思うようには進まなかったが、お昼までに目標としていた全ての資材を運び終えることができた。最後に土嚢をビニールシートで被い下山、黄金山神社に参拝し全日程を終えた。

十三時に島を後にし、石巻市の被災地を見て廻った。復興は着実に進んでいるが、手の付かない現地の様子を目の当たりにすると、時間がそのまま止まっているようで、まだまだ震災復興支援を行っていると改めて感じた。(山口武徳 記)

氏青協議会との合同研修会

九月二十九日(土)、神宮にて開催され、当会より会長以下十六名が参加した。当日は千秋理事を講師に内宮各所の説明を頂いた。先ず五十鈴川の御手洗場にて手水をして御垣内参拝をさせて頂いた。皆、真剣な表情で参拝をしていた。次に内宮の各所の施設を細かく説明いただき日頃から参拝させて頂きながら新しい発見が沢山あった。

その後、神宮司庁会議室に会場を移して参加者の質疑応答に入った。研修終了後は神宮会館にて懇親会があり氏青神青会員が相互に親睦を深め合った。

(福井健士 記)



神宮神青との合同研修会

十一月九日(金)、神宮徴古館にて開催され、両会合わせて二十三名が参加した。研修は特別展「神札と伊勢信仰」を見学、神宮大麻全国頒布に関する講義という二部構成で進められた。特別展は神宮大麻全国頒布百四十周年記念として開催され、皇室に献上される大麻など拝見させて頂き、貴重な経験になった。

講義では現代においての神宮大麻頒布状況の説明から課題にいたるまで説明して頂いた。

近年は大麻頒布数も減体傾向にあるなど神宮大麻頒布を取り巻く環境も厳しくなっているが、先人達の労苦を偲びつつ、我々も神宮大麻奉斎の意義をさらに啓発していかなければならないと感じた。

(福井健士 記)

言葉とともに大麻を受けていたのだ。いたときは、少しずつかもしれないが、これまでの活動が実を結んでいることを実感した。

(福井健士 記)



建国記念の日啓発活動

本年は松葉牡丹の種配布

- 北部ブロック
 - 一、日時 二月七日(木)
 - 一、場所 近鉄四日市駅
 - 一、参加人数 九名
 - 一、配布数 八〇〇袋
- 中部ブロック
 - 一、日時 二月八日(金)
 - 一、場所 近鉄津駅西口
 - 一、参加人数 五名
 - 一、配布数 六〇〇袋
- 神宮・南部ブロック
 - 一、日時 二月二日(土)
 - 一、場所 宇治橋前
 - 一、参加人数 十名
 - 一、配布数 二、二〇〇袋



北部ブロック



中部ブロック



神宮・南部ブロック

神宮大麻頒布促進運動

十二月二日(日)、鈴鹿市東玉垣町鎮座の彌都加伎神社(遠藤龍夫宮司)にて行われ、会長以下二十二名が参加した。

当日は少々肌寒いが晴天に恵まれ、まず初めに遠藤理事奉仕のもと正式参拝を行った後、打ち合わせ・諸注意を行い、午前中は参加者全員を四班に分け、一班四〜五名でそれぞれ担当の氏子区域を回り、大麻頒布促進運動を行った。

氏子区域の中には昨年度より新たに大麻を受けられるようになった家庭もあり、本年も昨年同様受けていただけるか一抹の不安があったが全くの杞憂に終わり、感謝の



神宮式年遷宮啓発研修会

二月十八日(月)、東海地区の青年神職三十五名が神宮司庁に集い、神道青年東海地区協議会主催(東海地区遷宮委員会担当)により開催され、当会からは会長始め十一名の役員・会員が参加した。

先ず、内宮にて正式参拝を行い、神宮司庁会議室にて開講式が行われた。研修内容は、「式年遷宮について」をテーマに、神宮より音羽悟主事を講師に迎え、ご講義を頂いた。式年遷宮の意義や神宝装束の奉製を中心に、約三時間の講義を頂いた。特に神宝について、七・一四種・一五七六点もの神宝が奉製され、一点一点時間をかけて



程が収録されている映像を鑑賞する中で、式年遷宮の意義の大きさや、神宝に携わる人々の強い気持ちを伺い知ることが出来た。

いよいよ本年、第六十二回神宮式年遷宮が斎行される年を迎えた。

次回の式年遷宮を迎える頃になると、我々青年神職が、その完遂の為に第一線に立ち、尽力すべき時代が来ることは明らかであり、次代への伝承の大切さと我々が担う責務の重さを痛感した今回の研修会であった。

(菅原工記 記)

表紙解説

表紙の写真は、神宮大麻頒布促進運動です。

例年、青年会事業として続けており、昨年の九月に神宮大麻全国頒布百四十周年記念表彰を受賞致しました。これも偏に諸先輩方から脈々と続けてこられた成果であります。今後この事業をしっかりと引き継ぎ、神宮の神徳宣揚に努めて参ります。

(菅原工記 記)



こと、技術の伝承が途絶えることなく伝わっている事などを拝聴した。又、神宝の奉製過

県外・中央研修会

平成二十四年度神道青年全国協議会中央研修会が高知県高知市にて開催されるのに合わせて、前日の三月十二日(火)に高知に入り県外研修を行った。参加者は会長以下五名。

まずは駅前にあるNHKの大河ドラマ「竜馬伝」のセットを移築して作られた竜馬伝幕末志士社中を見学した。坂本竜馬を中心に幕末から明治維新までの歴史をわかりやすく見ることが出来た。その後、現存十二天守に数えられる国の重要文化財の高知城まで足を伸ばした。天守閣自体は低いものの高台に作られている平山城の為最上階からは高知市内を一望することが出来た。

翌日の朝は、土佐藩初代藩主山内一豊公が御祀りされている山内神社へ参拝し、桂浜へ向かった。坂本竜馬記念館を見学。維新をテーマとした研修会を前にして土佐の志士達の歴史を学ぶことが出来た。その後、高知県護国神社へ正式参拝し、会場へ向かった。

中央研修会は三月十三日(水)から二日間にわたり、ザ・クラウ

ンパレス新阪急高知にて「維新」立ち上げられ！現代の草莽の志士」と題して行われ、会長以下九名が参加した。

第一講は志學館大学人間関係学部教授の原口泉先生に「幕末日本の人材教育」と題して講義をして頂いた。幕末の志士達は出世の為ではなく国の行く末を案じ国の役に立ちたいという思いから向学心を高めたことを学んだ。

第二講は俳優・演出家・元自衛官の今井雅之先生より「維新と感謝」と題して講義を頂いた。愛国心を口にすることが憚られ、日の丸を掲げることには気が使う現状に



対する不満と憤りを熱く語られ、神職が青少年に正しい歴史を教え、てあげて欲しい」という熱いメッセージを頂いた。また、先生が特攻隊を題材とした舞台を演じる上で実際に隊員の方へ取材されたお話を伺い、世間の特攻隊のイメージと現実とのギャップや隊員の方が抱いた「家族を守りたい」という強い想いを再認識した。

翌日の第三講は軍事ジャーナリストの井上和彦先生に「いま日本に迫り来る危機と自衛隊」忘れてはならない東日本大震災における自衛隊の闘い」と題して講義を頂いた。震災復興活動の中で、メディアの報じない自衛隊の活躍について、自分を犠牲にして被災者のことを一番に考え、過酷な環境の中激務に励む自衛官の姿や、自衛官と被災者の子供達との交流などのエピソードを教えてくださいました。

この二日間を通じて、幕末の志士や特攻隊、自衛官の中に息づく日本人特有の高潔な精神や倫理観、愛国心などが薄れ行く現代、その中で我々青年神職こそが気概をもって精神文化を守り伝えて行く事に、まさしく命をかける覚悟で臨んで行かなければならないと感じた。

(塚本 敏 記)

編集後記

この榊葉がお手元に届く頃には季節もすっかり「春」になっていと思われ。四季の初めであり、古い年から新しい年へ移行する季節、それが春である。心機一転、新しい気分になる季節で、積極的・活動的なイメージも持つ。

春(はる)の語源を調べたところ、諸説あるなかで「張る」が一番しっくりくる。(他は曇る、晴るなど)「草木が芽吹き、根が張る」という意味であり、瑞々しい命の根が張り、新たに芽生える「誕生」の季節である。

さて、本年、平成二十五年は斯界にとっても近年稀な「張る」年である。今年熱田神宮が創祀千九百年の慶節を迎え、五月には出雲大社、そして十月には神宮の遷御が控えている。大いなる神が新しい命を紡がれる。古きから新しきへ、一年と雖も神々の悠久の時間の中では、移ろいの時間はほんの一瞬である。「気が付いたら終わっていた」では勿体なく、申し訳ない。今一瞬を大事にご奉仕に励んで行きたい。(磯島 一郎)

会報「榊 葉」

第 39 号

平成 25 年 3 月 31 日

発行者 石上 陽 祥

編集 総務広報委員会

発行所 伊賀市下郡591

猪田神社内

三重県神道青年会